

語る

人生の贈りもの

街ろろろろ カメラなければ僕は

好きなのはまあ、オムライスかな。いま86歳だけど、昔からほとんど同じだね。

《コントラストの強い、アレ、ブレ、ボケと呼ばれる写真表現はハードボイルド。カメラを構える姿は今も絵になるが、飾らずに話す人でもある》

今日は朝起きて、床に落ちてたTシャツを撮りました。僕は毎日外に出ないと気が済まなくて、少々雨でも出ちゃう。以前のように1人で（東京の）新宿の街を歩くのは難しいから、バスや電車で（神奈川県）逗子や横須賀、鎌倉に行き、ろろろ歩いて撮っています。

《2020年に脳出血で倒

2025-8-25

写真家

森山 大道

①

れ、生活の拠点を東京・池袋から逗子の自宅に戻した》
意識不明から目覚めたときも、写真が撮れなくなるとは思わなかった。退院して逗子の家に戻ってまだ出歩けないときも、窓から外を撮っていた。



小型カメラでスナップを撮る森山大道さん。東京渋谷区、鬼室黎撮影

今も撮り方は同じで、スナップ。（フリンダーを見ない）ノーフリンダーも多いです。でも年齢に即した状態で、足がふらふら、よたよた。
新宿や池袋が遠のいてしまっただのは、残念だね。でも、鎌倉でも撮っているのは、人の多い小町通りだけです。そこしか興味がない。もうちよつとすたすた歩いて撮りたいとは思いますが、撮ってはコーヒー飲んで休憩

し、3時間ほどで50枚くらい撮影します。たばこは昔は80本、今は20本。医者には、しょうがないね、と言われていました。振り返ると、写真があつて、カメラがあつて本当によかつたと思えます。なければ僕は、どうしようもない人間だったな。

《そんな写真家は、双子として大阪の池田に生まれた》
僕が弟で、兄は一道。僕は大道。一卵性でした。

（聞き手 編集委員・大西若人）全15回
もりやま・だいごう 1938年生まれ。大阪で写真を始め、60年代以降の写真界の中心に。ハッセルブラッド国際写真賞、朝日賞などを受賞。

姉の少女雑誌 こっちが面白いわ

終戦直後に浦和にいたころには、進駐軍のジープが走っていました。チョコをばーんとばらまいて。僕もアメリカ兵がかぶる帽子を新聞紙で作ってね。

おやじが福井支社長になって福井の丸岡町に移っても進駐軍がいました。クリスマスになると彼らがよく行くバーの窓には飾りが貼られ、奥にはクリスマスツリーがあつてなんて素敵なんだと思つた。中にいる人たちが影絵のように見えてね。今でも、あの感情は忘れないな。アメリカへの憧れもあつて海の向こうに行きたくて、船乗りになりたいと思つていました。《もう一つ楽しみがあつた》

写真家

森山 大道

(A) 2025-8-27

③



中学3年ころの森山大道さん(右)と姉・森山さん提供

夕方になると時々、おやじを駅まで迎えに行くんですが、駅前には映画館がある。映画のポ

スターを見たり、看板を見たりするのが楽しみでした。

学校の勉強はだめだったね。

言うのも恥ずかしいけど、興味が無い。一応ノートをちよつと取るけど、授業がつまらない。

でも、本は好きでした。家にもたくさんあつたし、学校も授業より、図書館に行つてみるみたいな感じでした。

大阪の豊中に引越し、中学に入ってからも学校にはあまり行かず、登校してもすぐに早引けして、映画へ。佐田啓二が出るような恋愛映画とかね。

それから、姉がとっていた「ひまわり」とか「それいゆ」とかの少女雑誌。中原淳一の絵

があつて、浅丘ルリ子なんかも出ていた。昔から読んでいた少女雑誌より、絵も写真もこっちの方が全然面白いやつて思っていました。

《中学1年のころ、おもちゃのカメラを買ってもらつた》

商店街に小さなカメラ屋さんがあつて、そのお兄さんが僕を気に入ってくれた。うろついていたら買われた感じですよ。

カメラもフィルムもちっちゃくて、姉や弟なんかを撮りました。まさにおもちゃのように遊びましたが、すぐに飽きてほっぽっちゃった。そのときは写真にあまり興味がなかったんですね。(聞き手 編集委員・大西若人)

運動や勉強ダメ 絵もダメだねー

《父親の転勤に伴い、中学1年の2学期から京都へ。街の道場で柔道を習ち》

柔道やっているとるを女の子たちが見ているので、かっこつけて始めたけど、しよっちゅう投げられ、すぐにやめたね。

僕は結局、スポーツはやるのもダメだし、スポーツ中継なんかもすぐに切っちゃう。大谷翔平はいい男だと思えますけど。

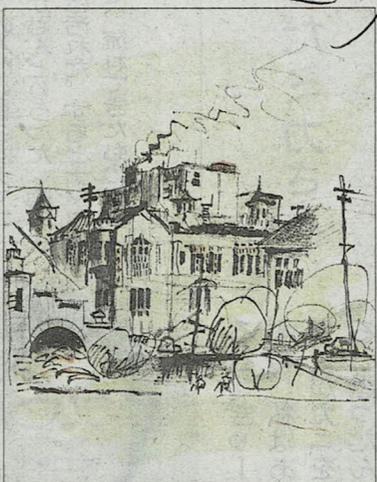
僕の場合は街が学校で、新京極にはよく行きました。誓願寺には青空楽団が来ていて、厚化粧にどぎつい色のドレスを着た歌姫なんか、岡晴夫とかの歌謡曲を歌う。それを聞いたり、楽団の女の子からレコードを買

(A) 2025-8-28

写真家

森山 大道

4



森山大道さんが15歳ごろに描いた「街」(1953年)ごろ、鳥根県立美術館蔵

©森山大道写真財団

ったり、近くの警察署で犯罪現場の写真を見たり。映画館ではジョン・ウエインを見たね。

《そして高校受験》

船乗り志望だから(三重の)鳥羽商船高を受けたけど、数学

が全くできなかった。家は大阪の茨木に移っていて、地元の公立校も受け、もちろん不合格。

京都の高校に入れてもらったのに、全然合わなくてすぐにやめました。おやじのついで大阪の工芸高校に移った

さんのデザイン事務所に入れてもらった。明朝体の活字をちょっと書く程度でしたが、近くには喫茶店もあるし、抜け出して街で絵も描いた。事務所には外国の雑誌もあって色んなものに影響されましたね。

けど、これもダメで二部へ。それでも学校に行かずにふらふらして、結局中退。おやじが、この子は何やってもダメか、という感じですが、悪いことしました。おやじの仕事の筋で、大阪の小山展司

《父親が列車事故で急逝》喪失感というより、「どうして」って感じです。あとひと月で僕が二十歳になるときでした。(聞き手 編集委員・大西若人)

別世界へ スナップの師と釜ヶ崎

亡くなったおやじの保険会社がデザイナーの仕事を通して、フリーとして自分の家で仕事することになりました。

保険会社の少し年上の女性と付きあったこともありましたが、別の人と結婚すると言われて、終わってしまいました。

おやじの死やそんなこともあり、岩宮武二先生の写真スタジオに気持ちが向いたんだよね。スタジオには、デザイナーのとき写真を頼みに行っていたんですよ。もちろんそんな写真は先生が撮ってくれるわけじゃないけど、元プロ野球選手だった先生は大柄で魅力的だし、みんな明るくスポーティー。じつとし

写真家

(A) 2025-8-29

森山 大道

5

ていたデザイナーの仕事とは別世界に見え、もうここで写真家になるしかないって感じでした。



森山大道「井上青龍 釜ヶ崎で」(1960年、島根県立美術館蔵)

©森山大道写真財団

それでレストランで食事をして、先生のところに行くと、「僕、写真やりたいんです」って言ったら、何だお前って顔でしばらく考えた後、僕の足をほいんと蹴ったんです。それが来てもいい、という意味だった。

《岩宮氏は正統派モダニズムのシャープな写真で知られる》

先生の写真したいにはあまり影響を受けなかった。むしろ、高弟の井上青龍さんです。釜ヶ崎に入り浸ってスナップを撮っている。僕を気に入ってくれて「一緒に行くか、撮影」と連れて行ってくれた。当時、あの街はピリピリしていて写真撮っていたら捕まる可能性もあった。

「お前こっち逃げろよ、俺はあつちだ」というような感じで。井上さんは本当の意味で先生でした。撮影する背中を見るのが楽しかった。街のスナップ、人間のスナップを教えてくださいました。スタジオでモデルさんなんか撮っても面白くないからね。もうひとり、堀内健さんという先輩は、写真雑誌などを見ながら、今は東京の東松照明の写真が面白いと教えてくれる。それに土門拳さんら東京の写真家は大阪に来ると、岩宮先生のスタジオに立ち寄るの。その人たちを見て、これは東京に行かなきゃ、と思っ込んでんだんですね。(聞き手 編集委員・大西碧人)

語る

人生の贈りもの

ブレボケ もらった映画フィルムが

《1964年春、細江英公氏の媒酌で道子さんと結婚。これを機にフリーになった》

彼女の家は（神奈川県）葉山。近くの逗子に住みました。

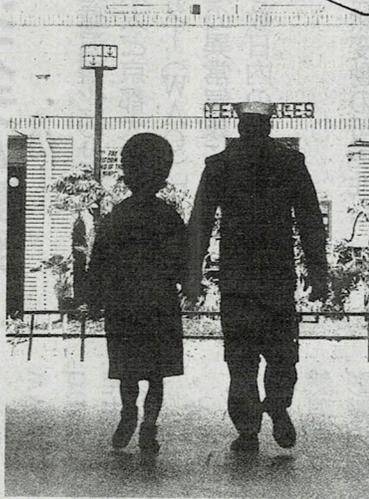
無職の男で、当初はかみさんというか、かみさんの実家に食わせてもらったようなもの。自分のカメラはもちろん、東松照明さんからもらったカメラまで賣で流したことがあり、母が結婚祝いにミノルタをくれました。

そんなころ、写真誌「フォトアート」の編集者が誌面に写真を頼むと言ってくれて。東京五輪の直前、国立競技場の夕景を撮った。スポーツに興味はないけど、スタジオアムを下から逆

写真家

A 2025-9-3
森山 大道

8



森山大道「ヨコスカ」(1965年)

©森山大道写真財団

光で撮りたかった。いま撮っている写真と変わんないね。載ったときは、本屋にすっ飛んで行って見ましたよ。黒木和雄監督の映画のストーリーを担当したことがあって、その縁で余った映画フィルムをも

らっていました。お金がないから、それを写真に使うんです。35mmという幅は同じですが、写真に比べて低感度。だから少しやすいブレ、ボケって言うけれど、わざとやることなんてそんなになかったんです。

《65年、基地の街、神奈川県横須賀市を撮り始める》

気持ちの中では東松さんの（米軍基地周辺を捉えた）「占領」を意識して、ある意味、何するものぞ、と。

子どもころは進駐軍に親しみを感じたけど、ベトナム戦争の真ん中だったから、釜ヶ崎を撮っていた井上青龍さんのスナップに近い感覚があったね。

一生懸命にプリントして、当時有楽町にあった毎日新聞社が見える駅前から「カメラ毎日」の山岸章二さんに電話しました。「基地ものは面白くないけど、近くにいたら来い」

山岸さんは猛スピードで見て「俺は面白いと思う」って。会議室にわーっとプリントを並べて、9分選んでくれた。若手で9分って簡単なことじゃない。それはうれしかったね。（聞き手 編集委員・大西若人）

面妖な新宿 自分と一体化するほど

教えたり、ギャラリーを運営したりはやっていても、撮る方は分からなくなっていて、何を撮ってもピンとこなかったね。

1981年に始まった雑誌の「写真時代」でも7年近く撮らせてもらったけど、相変わらずどうしようと思っていました。

「93年に、ファッションメーカーのヒステリックグラマーから大判の写真集の話が」

一人で1冊作れるならやるよってことになって、とにかく撮りたい瞬間に撮りたいものを全部タテ位置で。フィルム500本ぐらい使いましたね。

観念やイメージがどうのこうのではなく、目の前にあって気

2025-9-10

森山 大道

13

写真家



新宿を撮影する森山大道さん

2009年

になるものを撮る。そうやってこの本を作り、写真ってこういうことじゃないのか、とちよっとすっきりした。気づくのが遅いんです。次も作るうって言われて、今度は全部ヨコ位置で。今思うと（20年以上前の）

「写真よきようなら」からの、そのままながっていたんだね。《2002年に写真集「新宿」を出し、翌年毎日芸術賞》新宿の写真集でいただいたのはうれしいよね。東京に出たときから圧倒的にうろついていた

な街だと思っていました。色んな人がいて色んな匂いがする。《05年には荒木経惟さんとの2人展「森山・新宿・荒木」》荒木さんも僕も新宿が好きでお互いの写真を気に入っているからできたんだよね。でも彼は生粋の東京の下町っ子で、僕は大阪生まれ。2人の写真は共通点もあるけど、微妙に違う。

し、新宿と自分の体質が似てると勝手に思っています。自分のカラダと一体化するほど街を感じ覚えますね。細江英公先生のところに通っていた時から、いい意味で面妖

久しぶりにいっしょにゴールデン街を歩いたんだけど、僕はあちこちをパッパッと撮るでしょ。でも荒木さんには女の子たちが寄ってきて、彼もそっちの方を撮るんだよ。僕はそんなの関係なく撮っていましたね。

（聞き手 編集委員・大西若人）

僕の記録が 誰かの記憶に変わる

僕は自分のことを犬だと言ってきた。カメラを持つちゃあ路地に入って犬みたい撮る。特に野良犬は困ったもんだけど、なんか好きなんだよね。

でも、今は野良犬もいなくなつてしまわないし、最近は猫の方がずるくてしづといと感じます。なーんか可愛いところもある。僕も今や、カミさんから猫みたいだといわれています。

現在の僕は、「記録」という本のために撮っている面があるんです。年に2、3冊は出しています。そこに向けて、中途半端に撮るわけにはいかない。

↑1972〜73年に「記録」と題した写真集を自費出版する

写真家

森山 大道

15

も、5号で終了。2006年に Akio Nagasawa Publishing が版元となり復活した



次々にシャッターを切る森山大道さん
|| 東京都渋谷区、鬼室黎撮影

率直に、単純に写真は記録だと考えたネーミングで、その時に撮ったもの、最新の写真で作ろうと。日々撮れるメディアがあるのはありがたいです。

写真雑誌のときと同じようなショットなだけで、「記録」という頭で撮ると気分は違う。

街の中には人間を含めて色々なものが充滿しています。だから興味を尽きません。同じようなものばかり撮っているとかわれるけど、俺はこれを見ただよ、記録したんだよ、って思うわけね。自分の姿や影が写っている写真も多い。でも自分が被写体でもないじゃない。

これは僕の記録なんだけど、

最終的には見る人の記録や記憶に変わってゆくと勝手に思っています。それに今も、写真は世界の断片のコピーだと考えています。だから自分が何かを創造したとは思わない。アーティストという意識はないんです。

カメラを持つと見え方が変わるというより、自分の体、細胞がふつと変わるんだよね。身体が感性とつながる。考えるぐらいいなら、撮った方がいい。

いつも言うけど、写真があつて、カメラがあつて本当によかったと思う。それに尽きるね。

(聞き手 編集委員・大西若人)おわり
◆次回はイラストレーター 宇野亞喜良さんです。